

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール

【会長賞】

「中学生が農業体験 持続可能な農業に向けて」

笛川中学校 2年 掛本 陽さん

峡東地域にある笛川中学校の生徒たちは、農業体験に参加し、山梨市牧丘町で果樹農家をしている澤登早苗さんによる指導の元、ブドウや大豆の育て方を聞き、汗水を垂らしながら必死にやり、元気よく学んだ。

なぜ、生徒たちは農業体験をしているのか。それは、近年、山梨県の農家人口が減少しているからである。山梨県農政ポケット資料集（令和五年）によると、

約二万人減少したとある。峡東地域は、複雑な扇状地の特性や環境を巧みに利用し、多品目・多品種の果樹が栽培されてきた。四季折々に美しい農村風景を創り出し、二〇二二年七月一八日に美しい農村景観と高度な栽培技術が認められ世界農業遺産に認定された。だが、このまま行けば後継者が不足し、高齢の農家の負担が大きくなっていくと推定される。また、百年以上続いてきた独特の栽培方

法やワイン作りの技術などが失われる可能性がある。笛吹市の山下市長は「一面に広がる葡萄棚やピンク色の桃源郷の景観は守っていかねければならない。」と、危機感と決意を表明した。（二〇二一年七月二〇日 山梨日日新聞より一部抜粋）

実や、若手農家の研究グループによる自主学習を積極的に支援し、技術や経営能力の向上、地域の小・中学生への体験学習などを実施し、未来の果樹農業を担う子どもたちに果樹農業への理解を深めるなどの様々な活動をしている。笛川中学校では、理解を深めるため地域の農家の人たちに伺って実際に大豆の栽培、さつまいもの収穫などを実際に体験したり、話を聞いたりしていた。体験した生徒に話を聞くと「今まで、私たちに関係がないと思っていましたが、人口が減少していく中だから、農業に私も関わっていきたい」と述べ、意欲を示していた。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール

【アドバイザー賞】

「地球温暖化による

ぶどうへの影響」

笛川中学校 1年

渡邊 結花さん

毎年のように猛暑が続く中、国内のぶどうに異変がみられていく。ぶどうへの高温による影響として、着色不良・着色遅延、日焼け果のほか、障害果の発生、発芽不良、凍霜害、裂果、虫害の多発等が報告されている。果樹は品目によって代表的な産地や特徴的な果樹ブランドがあるように、地域的な気候との関連が強く、水稲

等と異なり気候への対応の幅が狭い。しかも、およそ一・七度の気温上昇が予測される二〇三一年〜二〇五〇年頃には、適応策を導入しなかった場合、着色不良発生地域が大きく拡大すると予想されている。このまま、猛暑が毎年進んだらぶどうが作れなくなると予想されている。

笛川中学校一年の生徒たちは、澤登早苗

さんのぶどう畑に農業体験に行った。その農園では、暑さによって、日焼け果しているぶどうが多発していた。早苗さんは「こんなことは初めてだ。地球温暖化が進んでいるせいだ。」といていた。生徒たちは、猛暑と雨量不足による乾燥が進んでしまったぶどうを見て「天然の干しぶどうができていく」と驚いていた。また、粒の小さいぶどうがたくさんできていた。「今年にはあまり雨が降らなかったからぶどうのひとつひとつの粒が小さい」とも早苗さんが言っていた。大きい粒も小さい粒も一粒に含まれる糖分の量はそれほど変わらない。

そのため、一粒が大きい方が、糖分が分散され甘みがうすくなる。だから、一粒が小さいほうが、一粒に甘さが集まり、すごく甘くなる。ぶどうの粒は、大きい方が見栄えがいいけど、小さい方が甘くなる。我が家の農園でも、「今年のぶどうは小粒だが甘くてとても美味しかった」という声が多数寄せられている。

ぶどうの粒は大きい方がいいのか小さい方がいいのか。消費者が選ぶのはどちらだろうか。

【アドバイザー賞】

「ぶどうの袋と

かさの違いと栽培方法」

笛川中学校 1年

精進 竜斗さん

私達笛川中学校一年生は七月八日、総合の時間を用いて、牧丘町に住む澤登早苗先生の畑でご指導のもと、ぶどうの袋掛け、かさ掛けの仕方を学んだ。そこではぶどうの袋も種類によって分け方があり、針金の通っている袋をぶどうに掛ける場合は袋掛け、ホチキスで止める袋の場合にはかさ掛けと呼ぶということが分かった。実際に、袋とかさを見

てみると、袋はぶどう全体を覆っているのに対し、かさはぶどうの頭部分だけを守る形だった。なぜ袋とかさで分けられているかというと、食べるブドウは見た目を気にしたり、農薬にも気をつけたりするため、袋をかける場合が多く、ワイン用のぶどうは見た目を気にしなくていいことから、雨よけに特化したかさをかけるからだ。

これを聞いて、袋を種類ごとに分けるとコストパフォーマンスの削減にもなるのにそのまま美味しく食べたり飲んだりできるから一石二鳥だと筆者は思った。

ところで皆さんは、ワイン用のぶどうと食用のぶどうで栽培方法が違うのはご存知だろうか。まず、ワイン用ブドウは糖度や成分を意識して育てられる。なぜなら、ワインのアルコールを生み出すのに高い糖度が必要だからだ。そのため水はけが良く、栄養分の少ない土地で水をあまりあげない方法で育てられる。こうすることで、ぶどうの実にストレスがかか

り、糖分などが凝縮されるのだ。その一方、食用ぶどうは粒の大きさが重視される。なので房に袋をかけ、特殊な農薬を用いて種なしにしたり、粒を大きくする。食用ぶどうはワイン用ほど高い糖分を求められず、適度な水分を持った食べやすい品種になるように栽培する。

このようにぶどうの袋とかさの違いには理由があり、栽培方法にも関わっていることが分かった。そして美味しいワインやぶどうが食べられているのは何度も試行錯誤を繰り返してきた農家方々のおかげだと実感した。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール 健闘賞 作品

「山梨の果実からつなぐ未来」

笛川中学校 2年

竹川 結麻さん

山梨県は「フルーツ王国」として知られている。ぶどうやもも、すもも、さくらんぼなど、多くの果物が作られており特に「ぶどう」「もも」は日本一の生産量を誇っている。

評価した。また、甲州式棚と疎植・大木仕立てを組み合わせた栽培は、降水量の多い日本の気候に適応するため開発された技術であり、現在では日本各地に普及している。

山梨県の果樹栽培が盛んな理由には、気候や風土が関係している。「おいしい未来へやまなし」によると、山梨県は山々に囲まれた盆地であり、豊かな水、長い日照時間、昼夜の寒暖差などの条件に恵まれている。さらに、扇状地などの傾斜地には、水はけのよい土壌が広がっており、果物づくりに適している。このため、高品質でおいしい農畜水産物が育てられているのだ。

山梨市立笛川中学校では、澤登早苗さん（恵泉女学園大学・大学院教授）の話を通して、学んだ。他にも、笛川中学校は笛川小学校とともに新たな試みとして「PBL」に取り組み、山梨市の歴史や環境などを学んでいる。中でも「育てる」というグループでは、郷土料理である「ほうとう」をつくるため、材料になる大豆などの作物の植え方や育て方を調べ、小中学校で協力し、初めての実践を行っている。しか

山梨市牧丘町にある石田えいじさんの畑では、山梨県で有名な巨峰やシャインマスカットを栽培している。えいじさんにぶどうの栽培について聞いた。

と祖母に聞けないうえに、でも、慣れた手慣れた仕方や、農薬をかけることもできるようになりました。僕みたいに若い人が世界農業遺産を引き継いで行っている姿は、とても嬉しいです。」と語った。

令和四年七月一八日、山梨県の峡東地域（山梨市・甲州市・笛吹市）の果樹農業は、国際連合食糧農業機関（FAO）により「世界農業遺産」に認定された。FAOは、ブドウの甲州式棚と疎植・大木仕立てを組み合わせた栽培など独自の生産法で農業生物多様性を実現している点を

「ぶどうが病気にならないように農薬を使ったり、また、自然で美味しいぶどうにするために農薬を使わなかったりします。日当たりと、風通しが良いところで栽培するところがほとんどで、ここの牧丘町はすごく自然豊かでぶどうが栽培しやすい」と述べていた。

私はきょうやさんの話を聞いてから、石田えいじさんの大変さを知るため袋掛け、ぶどうの手入れ、箱作りのお手伝いを毎年やっている。十三歳の私もすごく辛かったのに八十歳の石田えいじさんはとてもすごいと実感した。

このまま、若い人が増えつづけて、峡東地域農業世界遺産を私達が受け継いでいきたいと思った。

「美味しいぶどうの秘訣」

笛川中学校 1年

石田 恵琉奈さん

山梨市立笛川中学校では、澤登早苗さん（恵泉女学園大学・大学院教授）の話を通して、学んだ。他にも、笛川中学校は笛川小学校とともに新たな試みとして「PBL」に取り組み、山梨市の歴史や環境などを学んでいる。中でも「育てる」というグループでは、郷土料理である「ほうとう」をつくるため、材料になる大豆などの作物の植え方や育て方を調べ、小中学校で協力し、初めての実践を行っている。しか

ためか芽が出なかったものもあった。「育てる」の奥井絵理香さん（班長）に伺ったところ「失敗を生かしながら、たくさんさんのことを学び伝えていきたい」と述べた。

と祖母に聞けないうえに、でも、慣れた手慣れた仕方や、農薬をかけることもできるようになりました。僕みたいに若い人が世界農業遺産を引き継いで行っている姿は、とても嬉しいです。」と語った。

私はきょうやさんの話を聞いてから、石田えいじさんの大変さを知るため袋掛け、ぶどうの手入れ、箱作りのお手伝いを毎年やっている。十三歳の私もすごく辛かったのに八十歳の石田えいじさんはとてもすごいと実感した。

このまま、若い人が増えつづけて、峡東地域農業世界遺産を私達が受け継いでいきたいと思った。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール 健闘賞 作品

「進化を続ける峡東地域」

笛川中学校 2年

芳賀 夢叶 さん

山梨市、甲州市、笛吹市の峡東三市は「扇状地に適応した果樹農業システム」が「世界農業遺産」に令和四年七月一八日、国連食糧農業機関(FAO)により認定された。世界農業遺産とは、何世代にもわたり、社会や環境に適応しながら継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業と、それに関わってきた文化、農業生物多様性などが関連し一体となった、世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域のことである。峡東地域では平成二十七年一〇月に「峡東地域世界農業遺産推進協議会」を設立し、認定に向けて様々な活動を行ってきた。

は小規模農家の生計の安定に重要な役割を果たし、果樹農業のレジリエンスを高めている。牧丘町では、ブドウ栽培に適した気候風土と、栽培方法の研究が実を結び、日本一の「巨峰の里」と呼ばれている。また、種なしぶどうは山梨県が発祥だという。この研究はデラウェアから始まり、昭和三四年に植物ホルモンの一種ジベリレンにより、処理をしたところ種がなくなることから研究が本格化したという。昭和五〇年後半には、巨峰の種なし栽培の技術が広く普及していったとのこと。種なしぶどう軸と種をしつかりと結びつけている部品がなく、皮一枚で軸とつながっています。そのため、熟度が上がると脱粒が起こりやすくなってしまう。なので種なしぶどうは早採りをするしかないのです。ブドウは熟していかなくても糖度が高い果物のため、早採りをしてもおいしいですが、種ありぶどうと比べると、すべてにおいて種ありぶどうの方が優れているという。

「フルーツ大国世界遺産の秘訣」

笛川中学校 1年

佐藤 朝友 さん

フルーツ大国の山梨県山梨市ではフルーツの栽培が盛んである。二〇二三年十二月十一日には世界農業遺産に認定された。その秘訣は三つある。一つ目は、育っている環境にある。ぶどう畑や桃畑には多くの植物、昆虫が生息しており植物が約二七〇種。昆虫が約五五〇種に及ぶ。また、この植物たちには雨水による土壌や養分が流れるのを阻止する役割がある。気候に関しては、年間を通して日照時間が日本一長い。そのため、太陽の光をたくさん浴び、フルーツの甘味の元でんぷんが作られる。また、昼と夜との寒暖差が大きいいため、日中に作られたでんぷんは、夜の気温が低いため消費されず、フルーツの中に糖度が蓄えられる。つまり、他よりフルーツが育ちやすい環境になっている。

植える。そして、ぶどうの主枝を柱に沿って伸ばし、その他の枝をワイヤーに沿って伸ばす。これをするによって、ぶどうが地をはわず、果実が汚れ、傷む心配がない。また、虫や動物に食べられる心配がなくなる。さらに、ぶどう棚栽培を行うことによって、雨風にあたり枝が折れても補強ができ、つるが太陽の光を浴びることができ。これらの方法は、四〇〇年以上前から行われている。二つ目は、長年にわたる観光農業・果樹農業である。観光農業は江戸時代から宿場町として栄えた甲州市勝沼町でぶどうを販売したことが始まり。その後、観光ぶどう園の原形となるぶどう見学が明治二十七年から始まる。果樹農業のワイン醸造は一四〇年前から行われ、ワイナリーとぶどう農家は密接に関わり合い発展してきた。現在でも、小規模なワイナリーが数多くある。温暖化が進んだ今でも世界農業遺産であることは変わらない。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール 健闘賞 作品

「峡東地域、果実の魅力」

笛川中学校 1年

雨宮 彩芽さん

令和四年七月、山梨県峡東地域（山梨市、甲州市、笛吹市）の「扇状地に適応した果樹農業システム」が世界農業遺産に認定された。世界農業遺産に認定されるには五つの基準に合格する必要がある。一つ目はランドスケープ及びシースケープの特徴、二つ目は地域の伝統的な知識システム、三つ目は文化・価値観及び社会知識、四つ目は食糧及び生計の保障、五つ目は農業生物の多様性だ。今年の七月、笛川中学校の一年生はぶどうの袋掛け、傘かけをしに世界農業遺産に認定された一つである、牧丘町の農家へ行った。ぶどうの袋掛け、傘かけは害虫や鳥による被害を防ぎ病気から果実を保護するために行うぶどう作りにおいて大切な工程だ。

栽培されている。その中で、山梨県で主に栽培されているぶどうの品種は、デラウェア、巨峰、ピオーネ、シャインマスカットなど定番から県オリジナル品種まで多岐にわたる。デラウェアは小粒ながらも甘みが強く、昔から親しまれている品種だ。巨峰はぶどうの王様と呼ばれ、甘味と酸味のバランスが良く人気の品種。ピオーネは巨峰に似ているが、より肉厚で濃厚な味わいが特徴だ。シャインマスカットは皮ごと食べられる種なしで、マスカットの華やかな香りと強い甘みが人気の品種。さらに、代表的な品種として山梨県オリジナルの新品種サンシャインレッドや希少品種の甲斐キング、藤稔、ゴルビなどが挙げられる。

このように峡東地域では、王道の品種からマイナーな品種まで数多くのぶどうを栽培している。これからも地球温暖化や少子高齢化が進む中、世界農業遺産に認定された峡東地域の果樹農業システムで、ぶどう作りは受け継がれていく。

「山梨市世界農業遺産

認定とその課題」

笛川中学校 2年

松井 優翔さん

令和四年七月一八日、峡東地域は「峡東地域の扇状地に適応した果樹農業システム」が認められ、世界農業遺産に認定された。世界農業遺産とは、Globally（世界的に）Important（重要な）Agricultural（農業の）Heritage（遺産）Systems（仕組み）を指し、正式名称は世界重要農業遺産システム（GIAS）。この地域が認定された理由は地域に自生する草種（雑草）を利用した草生栽培が特徴である。

この草生栽培を行うことにより、刈草が養分になり、そこに生息する植物や昆虫の暮らしを守っている。峡東地域世界農業遺産推進協議会が作成したパンフレットの澤登さんの話によると「そもそも有機栽培は、美味しい果物づくりの基本であり、環境にも優しい方法なのです。」と書かれていた。

また、澤登さんの講演では、「有機栽培を行っているため、多様な生物が生息している部分を評価された」と喜びを語っていた。牧丘地域で、ももやさくらんぼなどを栽培する松井玄行さん（八三）は「山梨市の良いところは平らなところが多い。昔はぜんぜん違い、平らじゃなかった。悪いところは高齢者が多くなり、畑や作業人数が減っている。農業がどれくらい続くかが本題である。」と語った。

一方で若者の地域離れにより、高齢化が進んでいるなか、跡継ぎが見つからなかったり、耕作放棄地が増加したりしている。また、食生活の変化で国内の果物消費量は減ってきている。これらの状況は、地域の農業や伝統の継承に深刻な影響を及ぼしており、地域全体の課題となっている。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール 健闘賞 作品

「山梨の宝シャインマスカット」

笛川中学校 2年

武藤 有愛さん

山梨市、笛吹市、甲州市の三市で構成されている峡東地域は令和四年七月、峡東地域の扇状地に適応した果樹農業システムとして世界農業遺産に認定された。独自の生産法で農業生物多様性を実現している点が評価された。世界農業遺産(GIHS)とは、社会や環境に適応しながら何世代にもわたリ継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業とそれに密接に関わって生まれた文化、ランドスケープ及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統的農林水産業を営む地域のことである。そんな峡東地域では多くの果物が栽培されている。峡東地域で栽培されている果物の一つであるシャインマスカットは、山梨で多く生産されているが、ここ数年で価格は下がる傾向にあるという。

シャインマスカットは、一九八八年に農研機構が安芸津二一号と白南を交配して誕生した品種で、出始めた頃は知名度が低く、価格も高くなかった。しかし、「皮ごと食べられる」「種がない」といった手軽さや海外需要の増加なども相まって価格が上がっていったといわれている。現在は生産量の増加により二〇二一年をピークに価格が下がっている。赤系・黒系のぶどうを育成するには二五度以上が必要であり、それ以上の温度になると色が付きにくくなり、商品価値が低下するという。その点、シャインマスカットには色付きの心配がいらないうという強みがある。地球温暖化が進む近年では、気温上昇によるロスが少ないシャインマスカットは収益が高く、生産者にとって有利な選択となっている。

日本のフルーツは、産業保護などの観点から決められた地域にのみ輸出されている。そのため日本のフルーツは日本でしか味わえないことが多い。日本のフルーツへの期待はこれから更に広がっていくだろう。

「峡東地域、世界農業遺産決定」

笛川中学校 2年

荻原 昂矢さん

山梨市、甲州市、笛吹市の峡東三市は令和四年七月一八日に国連食糧農業機関(FAO)から世界農業遺産に認定された。世界農業遺産とは、社会や環境に適応しながら何世代にもわたリ継承されてきた独自性のある伝統的な農林水産業と、それに密接に関わって育まれた文化、ランドスケープ、及びシースケープ、農業生物多様性などが相互に関連して一体となった、世界的に重要な伝統農林水産業を営む地域である。例えば日本国内では峡東地域の他に石川県能登半島の「能登の里山里海(二〇一一年認定)」、新潟県佐渡市の「トキと共生する佐渡の里山(二〇一一)」「があり、世界では中国の「万年の伝統稲作(二〇一〇)」、エジプトの「シワ・オアシスのナツメヤシ栽培システム(二〇一六)」がある。

峡東地域は、日本のブドウ栽培発祥の地とされ、ブドウ「甲州」は平安時代にはすでに栽培されていたとも言われている。

モモ、スモモ、カキなども古くから栽培され、江戸時代にはすでに果樹の産地として知られていた。峡東地域では、起伏と傾斜が大きい扇状地の立地を利用して、十品目以上の果樹を適地・適作している。四百年以上前には、ぶどう栽培に不利な多雨・湿潤という環境で安定した栽培を行うために「甲州式ぶどう棚」を開発。後に峡東地域で開発された「疎植・大木仕立て」とともに日本におけるぶどう栽培の基本技術となっている。また、果樹園に自生する植物を利用した草生栽培は、土壌の流出防止や有機物を補給する効果だけでなく、果樹園に昆虫などの生物が生息できる環境を作り、生物多様性にも大きく寄与している。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール 健闘賞 作品

「山梨の農業モデル―国内外から評価」

笛川中学校 2年

信藤 嘉来さん

峡東地域、世界農業遺産に認定
伝統と環境配慮の農業モデルが国内外に評価

山梨県峡東地域が、国連食糧農業機関(FAO)による「世界農業遺産」に認定された。長年にわたり地域の伝統的農法や景観を守り続けてきたことが評価され、持続可能な農業の模範例として注目されている。

峡東地域は、富士山麓に広がる肥沃な土地で、ブドウや桃

をはじめとする果樹栽培が盛んだ。特に、棚田や段々畑の景観は、自然と人間の知恵が融合した貴重な文化遺産とされている。こうした農地は、伝統的な技術と環境に配慮した農法により維持されており、その美しい景観と農業技術は国内外から高く評価されている。FAOは、「峡東の農業は、地域の自然環境と文化を調和させながら持続的に発展させているモデル例」と評価。気候変動や環境破壊の課題に対応しつつ、地域の伝統と生態系を守る取り組みが、世界的にも重要な指標となった。

認定は、長い歴史と努力の結晶。今後も伝統的な農法と環境保全を両立させ、地域の魅力を発信し続けたい」と意気込みを語った。県や市町村も、地域資源の保護や次世代への技術継承、観光振興策を進め、地域の持続可能な発展を目指している。

また、峡東地域の認定は、ブランド価値の向上や観光客誘致、地域経済の活性化にもつながると期待されている。環境に優しい農業と伝統的景観を未来につなぐ取り組みの一環として、教育や啓発活動も積極的に進められる予定だ。認定は、国内のみならず世界に向けて、伝統的農業の価値と環境共生の重要性を伝える象徴となり、持続可能な農業の普及に寄与することが期待されている。峡東地域は今後も、伝統と革新を融合させながら、地域資源を最大限に生かし、未来に向けた農業のモデルケースを築いていく方針だ。

「果樹栽培の技術」

笛川中学校 2年

岩崎 伶美さん

山梨市、甲州市、笛吹市の峡東三市
令和四年七月一八日に世界農業遺産認定

峡東地域世界農業遺産推進協議会によると、峡東地域は、古くから扇状地や自然条件に適応した、ブドウやモモ、カキなどの生産が盛んに行われていた。さらに、ワインや枯露柿などの加工品は、農家の生計や地域経済の安定を図るために知恵や努力から生まれたもので、こうした特徴が高く評価され、引き継ぐべき財産として日本農業遺産に認定された。

峡東地域は主にブドウ、桃、スモモ、柿を中心とした果実の栽培が盛んに行われている。果実すべて合わせて、少なくとも八〇種の果実を育てている。ぶどうや桃は全国一位を誇っている。なぜ、このように、多くの果実が山梨県で生産一位になっているのか。

理由は、恵まれた土地や気候も果樹栽培に大きく影響している。山梨県は扇状地が広がっており、水はけの良いことが特徴。気候は、日照時間が長く昼夜の寒暖差が大きいことが特徴。中でも、ブドウの甲州式棚

と疎植・大木仕立てを組み合わせた栽培方法。多雨・湿潤でブドウ栽培に不利な気候の中で、安定したブドウの生産を行うための開発された日本独自の独創的な栽培技術であり、現在では日本のブドウ栽培の基本技術となっている。これらが、ブドウや桃などの果樹栽培生産一位を誇る理由である。

巨峰の丘で有名なのは、山梨市の牧丘町で、果実の栽培が盛んなこともあり、笛川中学校の一年生では農業体験を行っている。大豆や、ブドウの袋掛けなどを行っている。大豆は毎年植え、収穫し、その後味噌作りをしている。このような取り組みを通して、自然や果樹栽培に少しでも触れる活動を行っている。峡東地域の特徴でもある扇状地は、その地形・地質から水の確保が難しく、古くは数百年前に開削された堰と言われる大小三〇〇以上の水路により、農業用水や生活用水を確保してきた。

【会長賞】

「世界農業遺産と

峡東地域の取り組み」

塩山高等学校 3年 熊坂 麻凜 さん

山梨県の農業は、豊かな自然と人々の努力によって長く支えられてきた。峡東地域の扇状地における果樹農業システムは、(甲州ブドウ棚、枯露柿のカーテンなど)2022年に世界農業遺産に認定された。

ところで、皆さんは世界農業遺産を知っているだろうか。世界農業遺産とは、国際連食糧農業機関(FAO)が始めたプロジェクトで、環境破壊、人口増加な

どの社会的な影響により無くなる恐れのある伝統的な農業システムや文化・農地景観を守り、次の世代に引き継ぐというものだ。

しかし、現在では大きな課題を抱えている。挙げられるのは、高齢化と後継者不足である。若い人が少なくなっている。果樹園の維持が難しくなっている。だからこそ環境を見直すことが大切になってくる。また気候変動の影響も深刻化している。気温の上

昇により、果物の熟成が早まり、品質に影響が出ることもあり、農家はたくさん課題に悩まされている。

その課題を解決するために、ドローンによる農薬散布やスマート農業を活用したり、観光にも力を入れ、色々なフルーツの収穫体験やワイナリー見学、ワインの試飲など地域の産業にも触れることができるようにしている。また地域全体で「世界農業遺産・峡東フルーツ都市」として

ブランド化を進め、県外や世界にもSNSを活用し発信する動きもみられている。

世界農業遺産に選ばれた峡東地域は、自然と人の共存が生み出した重要な文化である。この伝統を次の世代につなぐためには、若い人の呼び込み・地域の人々の連携・スマート農業の導入などが必要となってくる。だからこそまた一から見直すことが大切である。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール

【アドバイザー賞】

「味わい、知る山梨」

塩山高等学校 3年

小野 絢夢 さん

フルーツ王国、山梨。気候に恵まれたこの地では、ご存じの通り果物の栽培が盛んである。品種は多岐にわたり、オリジナル品種も開発されている。だからこそ、それぞれの魅力を更に知ってもらいたい。今回は、山梨フルーツのブランド価値向上の力を探っていく。

最初に、山梨県産の果物とスイーツをコラボレーションさせた商品の販売だ。

これは山梨産果物の知名度向上につながるだろう。

現に、九月に高級菓子ブランド「アンリ・シャルパンティエ」と連携して作られたスイーツが販売された。今回はパルフェとショートケーキが販売されたが、サンシャインレッドやシャインマスカットをふんだんに使用した商品となっている。まずは若い世代に人気のスイーツを味わってもらい、

山梨フルーツの知名度を上げることがブランド価値向上の一步となるはずだ。

次に、SNSを活用した情報発信である。さまざまな国や年代で利用されているSNSを有効活用することで、山梨フルーツだけでなく、県全体のイメージ向上につながる。継続的な投稿が必要であるが、低コストかつ、スマホ一つで発信ができる手軽さから楽し

く続けることができないはずだ。さらに、インフルエンサーにPR活動を依頼することで、多角的な方面からの知名度を獲得できるのだ。

山梨には多くの魅力がある中で、まずは山梨のフルーツを知ってもらえる環境づくりから始めることが、ブランド価値向上のカギとなるだろう。

世界農業遺産 新聞記事制作コンクール 健闘賞 作品

「甲州市から伝える魅力」

塩山高等学校 3年

中村 薫聖和 さん

みなさんは山梨県の甲州市を知っているだろうか。甲州市はぶどうやワインの産地として有名で、日本を代表する農業の町だ。豊かな自然と歴史ある農業が今も息づいている。

特に注目したいのは、甲州市で行われている伝統的な農業と地域の文化だ。ぶどう畑はただの農地ではなく、景観そのものが地域の宝になっている。また、ワイン作りに関わる人々の知恵や工夫は、世界に訪れる魅力だ。こうした取り組みは「世界農業遺産」にも通じるものがあり、自然と人の共生を感じさせてくれる。

さらに、観光と結びついた農業も甲州市の強みだ。ぶどう狩りやワイナリー巡りは観光客に人気で、

農業の魅力を直接体験できる。高校生の私たちにとっても、地元の産業や文化を誇りに考えるきっかけになるだろう。

また、地域の人々だけでなく、若い世代の力も注目されている。高校生や若手農家がSNSで発信したり、地元のイベントで農産物を販売したりするなど、新しい形で甲州市の魅力を広めているのだ。伝統を守りながら新しい挑戦を続ける姿は、多くの人に感動を与えている。

甲州市から発信される農業の魅力は、未来の食や環境を考えるうえでとても大切な。伝統を守りながら新しい形に発展させる姿勢は多くの人に知ってほしい「地域の力」だと言える。

「甲州市の後継者不足」

塩山高等学校 3年

樋川 結月 さん

世界農業遺産を知っているだろうか。国連食糧農業機関(FAO)が認定する、社会や環境に適応しながら代々受け継がれてきた独自の農林水産業と、それに伴って育まれた文化・景観・生物多様性などが一体となった地域のことである。

山梨は、フルーツ王国といわれるほど農業が盛んである。特にブドウやモモが有名で、ブドウの生産量が国内一位をとっている。だが、農業の後継者不足が問題となっているのだ。後継者不足の原因は、高齢化、若者の都市部への人口流出、新規就農のハードルの高さ(初期費用、労働環境)、収入の不安定さ、重労働イメージ、経営のノウハウの継承が難しいことなどがあげられる。これらの課題を

解決するためには、若者が地元で働く魅力を感じられる環境を整えることが重要だ。例えば、働く場所や収入面の安定、学びながら地元貢献できる制度作りなどが求められる。

また、学校で、地域産業について学ぶ機会を増やしたり実際に地元の企業や農家で体験する機会を広げたりすることも効果的だ。私たち高校生が地域の産業に関心を持ち、働く人の思いに触れることは、甲州市の未来を考えるきっかけになるはずだ。地域で生まれた技術や伝統を「自分たちの手でつなぐ」という意識を持つことが、後継者不足を解決する第一歩になる。